

中学校

平成 13 年 度

教育研究員研究報告書

道

徳

東京都教職員研修センター

平成13年度

教育研究員名簿（道徳）

分科 会名	区市町村名	学 校 名	氏 名
第 1 分 科 会	港	高 陵 中 学 校	熊 谷 恵 子
	大 田	大 森 第 六 中 学 校	西 田 友 幸
	杉 並	神 明 中 学 校	◎ 吉 川 修 央
	葛 飾	葛 美 中 学 校	伊 藤 結 花 里
	立 川	立 川 第 六 中 学 校	川 元 泰 史
	多 摩	多 摩 中 学 校	清 水 倫 香
第 2 分 科 会	文 京	第 一 中 学 校	○ 清 水 秀 登
	大 田	石 川 台 中 学 校	大 竹 基 之
	豊 島	池 袋 中 学 校	織 部 明 広
	江 戸 川	二 之 江 中 学 校	西 野 和 之
	武 蔵 村 山	第 二 中 学 校	小 島 幸 子
	羽 村	羽 村 第 二 中 学 校	鈴 木 一 利

◎世話人 ○副世話人

（担当） 東京都教職員研修センター指導主事 中 嶋 隆 雄

目 次

I	研究主題設定の理由	2
II	研究の方法	4
III	内容項目 2 - (3)「友情」についての指導 (第1分科会)	
1	主題設定の理由	6
2	研究の内容と方法	7
	(1) 内容項目 2 - (3) のとらえ方	7
	(2) 生徒の実態と指導計画	8
	(3) 指導計画の工夫	9
	(4) 指導事例 (第2学年)	10
3	内容項目 2 - (3)「友情」のまとめ	13
IV	内容項目 2 - (5)「他に学ぶ広い心」についての指導 (第2分科会)	16
1	主題設定の理由	16
2	研究の内容と方法	17
	(1) 内容項目 2 - (5) のとらえ方	17
	(2) 生徒の実態と指導計画	18
	(3) 指導計画の工夫	19
	(4) 指導事例 (第1学年)	20
3	内容項目 2 - (5)「他に学ぶ広い心」のまとめ	23
V	まとめと今後の課題	24

豊かな人間性をはぐくむ道德の時間の指導

I 研究主題設定の理由

これからの教育においては、「生きる力」の育成が不可欠である。「生きる力」とは、変化の激しい社会において、どんな場面においても、他人と協調しつつ自律的に社会生活を送れるようになるために必要な、人間としての実践的な力であり、豊かな人間性を重要な要素としている。

「生きる力」を育成するために、今回の学習指導要領の改訂では基本方針が4点あげられており、その第1に「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。」があげられている。今日の社会状況を踏まえて、これからの学校教育を考えると、時代を超えて変わらない、調和のとれた人間形成が強調される所以がここにあると考える。特に、道德教育のかなめとなる道德の時間を、体験活動を生かしたり、家庭や地域の人々に協力を求めながら、子ども一人一人が直面する課題や悩みに主体的に取り組み、夢や希望をもって未来に向けて人生を切り拓く実践的な力をはぐくむことが求められている。

現在の社会の状況に目を向けると、自己中心的で他人のことには無関心という利己主義が横行し社会全体の利益を無視するといった傾向が増えている。そのような社会環境が、青少年の行動にも影響を与えている。いじめ、不登校、新しい「荒れ」として、普段おとなしい子どもが、ささいなことでかっとなり、暴力におよぶなどの事件が起きている。また、子どもの「荒れ」は学校の中まで及び、授業が成立しない学級や学校などがでてきている。その根底にある心の荒廃等を解決することは、緊急の課題である。

こうした状況を踏まえ、学校の教育活動全体を通じて行なう道德教育は、一層改善・充実されなければならない。特に、道德教育のかなめとなる道德の時間において、人間の心や生き方についてより深く考え、自己の向上を図るためにどのような内容を取り上げて指導すればよいのかを検討した。

中学生の時期は、心身共に発達し、他者との連帯を求めると同時に、自我の確立を求め、自己の生き方についての関心が高まる時期である。その一方で、自己の生き方について悩む時でもあり、他者との関係を豊かにもてるかどうか、中学生の道德性の形成にも影響を及ぼす。そこで、今年度の研究主題を「豊かな人間性をはぐくむ道德の時間の指導」とし、研究の仮説を「自己を他の人とのかわりの中でとらえて、望ましい人間関係の育成を図ることをねらいとした道德の時間が実践されれば、豊かな人間性をはぐくむことができるであろう」と設定した。

そして、本研究を進めるに当たり二つの分科会を設定した。両分科会ともに人とのかわりを重視したいという願いから、研究の窓口を2の柱「主として他の人とのかわりに関すること」を取り上げ、内容項目については、第1分科会では2-(3)「友情」を、第2分科会では、2-(5)「他に学ぶ広い心」として研究を進めることにした。

《豊かな人間性をはぐくむ道德の時間》

〈 生徒の実態の把握 〉

- ・生徒とのコミュニケーション
- ・アンケート調査と分析



〈資料の選定〉

- ・興味、関心を喚起できる資料
- ・日常生活に即して考えられる資料
- ・多様な価値観を引き出せる資料
- ・ねらいを達成するのにふさわしい資料
- ・体験的活動のできる資料



〈資料提示の工夫〉

- ・T Tの連携による役割分担
- ・生徒が作成した資料(絵など)の活用



〈導入の工夫〉

- ・授業への期待感
- ・意識づけ



〈発問の工夫〉

- ・ねらいに焦点を絞った内容
- ・興味を呼び起こす内容
- ・自らの思いを深められる内容
- ・多様な考えを引き出せる内容
- ・心を揺さぶり、心の変化を引き出せる内容



〈発表の工夫〉

- ・T Tによる発言の引き出し

- ・小集団を生かした多くの意見交換の場
- ・ワークシートやノートの利用
- ・ディベート
- ・ロールプレイ



〈板書の工夫〉

- ・考えをたどれるような構成
- ・板書、短冊の利用による発問の共有化
- ・絵などを使ってイメージの共有化
- ・T Tの連携による役割分担



〈終末の工夫〉

- ・道德的価値を押しつけない
- ・道德的価値の自覚を深める
- ・保護者の体験談の活用

〈生徒の心の変化〉

あいまいだった思いがはっきりする

↓ (自己理解)

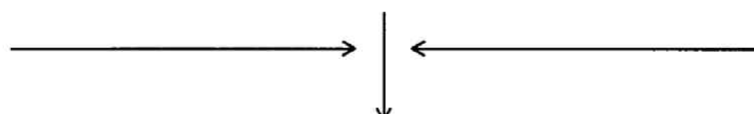
様々な考えがあることを知る

↓ (他者理解)

自らの考えを再構築する

(自己理解の深化と発展)

学級活動、学校行事、総合的な学習の時間、教科の授業での学習活動を連携させた学習指導計画を作成し、学習の深化と効率化を図る。



内容項目 2-(3)「友情」
内容項目 2-(5)「他に学ぶ広い心」



道德的価値の自覚
人間として生き方の自覚
道德的実践力の育成

家庭、地域との連携

- ・体験談を話してもらおう
 - ・ゲストティーチャーとしての授業参加
- など

II 研究の方法

1 研究の概要

生徒の実態を把握するとともに、指導計画を立てるために生徒対象に調査研究を行った。各分科会共通の項目として「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」に関する内容と各分科会でねらいとした道徳的価値に関する指導内容について事例項目を設定し、調査を実施した。自己認知の三つの項目と事例項目の間で統計処理を行い、結果を考察、分析して指導計画を立て実践した。指導計画を実施した後、再度、同じ生徒を対象に同じ調査内容で調査を行い、生徒の変容を把握する実験法の手法を取り研究を進めることにした。

2 調査研究

(1) 調査対象

都内公立中学校 6 校、第 1 分科会は第 2 学年 251 名、第 2 分科会は第 1 学年 135 名を対象として事前調査を平成 13 年 7 月に、事後調査を平成 13 年 11 月に実施した。

(2) 調査内容

共通の調査として「自己認知」の項目、「対人関係」の項目、「学校適応」の項目を、各 10 項目ずつで行った。各分科会ごとにねらいとする道徳的価値に関する事例を設定し、それに対する意識や行動面での反応を見る調査を行った。

ア 「自己認知」の項目（とても・やや・どちらでもない・やや・とても、の 5 段階で答える。）

1. 明るい	_____	暗い	6. 無責任	_____	責任感のある
2. 強い	_____	弱い	7. 消極的な	_____	積極的な
3. 温かい	_____	冷たい	8. 信じやすい	_____	疑い深い
4. 頼りない	_____	頼もしい	9. 無気力な	_____	意欲的な
5. 親切的な	_____	いじわるな	10. 自分勝手	_____	思いやりのある

イ 「対人関係」の項目（とてもそう思う・どちらかというと思う・わからない。どちらかというと思わない・まったくそう思わない、の 5 段階で答える。）

1. 人の気持ちの変化に敏感	6. ゲームは一人より相手がいる方がよい
2. 人の気持ちを理解しようとする	7. 人からどう思われているか気になる
3. 人の外見が気になる	8. 人の行動の理由が知りたい
4. 人のことをよく考える	9. マイペースで行動する
5. 人付き合いがよい	10. 身近な人についていろいろ知りたい

ウ 学校適応の項目（とてもそう思う・どちらかというと思う・わからない。どちらかというと思わない・まったくそう思わない、の 5 段階で答える）

1. 学校生活に満足している	6. 何でも話せる友達がいる
2. 授業中別のことをしている	7. 先生と気軽に話せる
3. 友達と一緒にいると楽しい	8. 規則を守らないといけないと思う

4. 友達付き合いがうっとうしい
5. 勉強が楽しい

9. 将来に希望をもっている
10. 行事などに積極的に取り組む

エ 「事例項目」 (第1分科会、第2分科会とも、とてもそう思う・どちらかというと思う・どちらともいえない・どちらかというと思わない・思わない、等の5段階で答えることを原則とする。)

第1分科会の事例項目

○「友達の定義」

- ・「友達」とは、何でも言いあえることである。
- ・「友達」とは、いつも一緒に行動する人のことである。
- ・「友達」とは、自分と同じような考えをもつ人のことである。

○「友情に対する意識」

- ・友達がまちがった行動をしていたら注意したいと思う。
- ・その場にはいない友達の悪口は言わない方がいいと思う。

○「実際の行動」

- ・友達がまちがった行動をしているとき注意できる。
- ・友達が他の友達の悪口を言っているとき一緒に悪口を言ってしまう。
- ・友達から注意されたとき、素直に聞ける。

第2分科会の事例項目

○「事例1」

- ・話し合いのとき、普段あまり話さない友達の考えを聞いて、「なるほど」と思う。

○「事例2」

- ・クラスメートの一人一人の良いところを一つ以上あげることができる。

○「事例3」

- ・友達に「地域清掃活動」に参加しようと誘われたとき、あなたは参加しますか。

Ⅲ 内容項目 2 - (3)「友情」についての指導（第 1 分科会）

1 主題設定の理由

「豊かな人間性」は、人と人との豊かなかかわりをとおしてはぐくまれるものである。

しかし、昨今の社会の状況から考えると、人間関係が希薄になっていることは否めない。子どもの間でも、自己中心的で、他人のことには無関心になっているという風潮もある。その一方で、ひきこもり等、人とのかかわり方がわからず悩むケースも起こっている。

そこで、第 1 分科会では、内容項目 2 - (3)「友情」を通じた指導を行うことにより、「信頼と敬愛に根ざした人間関係」を育て、豊かな人間性をはぐくもうと考えた。友情の尊さを理解し、信頼関係に基づいて、互いに励まし合い、高め合おうとする態度を育てる道德の時間を実践することにより、人間としての生き方について自覚が深まり、豊かな人間性を育てることにつながると考えたからである。

中学生の「友情」に関する実態について考えてみると、この時期は個性がはっきりしてくるため、自己主張が強くなる傾向がある。そのため、友達との間に摩擦が生じて、いじめや仲間外れが起こったりすることも多い。その煩わしさを回避しようとして、一人でいることを望んだり、時には相手に無批判に同調したり、自分に都合のよい相手とだけ付き合う生徒もいる。また自分が傷つくことを恐れるあまり、最初から一定の距離をとった関係しかもたない者もいる。他方、携帯電話に多数の名前を登録し、実体のない友達の数に満足する者も見られる。その反面、積極的に「友情」を求めて悩み、模索する生徒の姿も見られる。これらの状況は、「友情」についての理解が不十分であることを如実に示している。「友情」とは、そこに互いの信頼関係が存在することにより成り立つものであり、その根底には、相手への敬愛の念が存在し、支え合うものである。

そこで本分科会では子どもたちに「友情」について理解させるとともに、お互いを信頼し、励まし合い、高め合おうとする態度を育てたいと考えた。道德の時間においては、「友達とは何か」、「友達をどうつくるか」、「友達関係を質的にどう高めるか」、「友情がこわれそうになったとき、どう修復するか」などのテーマを重点に置き、指導していくことが大切であるととらえた。

また、指導にあたっては、相手の成長を心から願って励まし合い、忠告し合える信頼関係を育てることが、真の友達関係を築くために必要であることを自覚させたいと考えた。そのためには、家庭や地域社会との連携を図りながら、道德の時間で「友情」について重点的に指導するとともに、各教科や特別活動、「総合的な学習の時間」との関連を図った授業の展開をとおして子どもたちの豊かな人間性を育成できるのではないかと考えた。

以上の点から、第 1 分科会では、生徒の実態を踏まえた上で、以下の仮説に基づき調査研究を行い、研究を進めることにした。

仮説

友情について理解し、相手の成長を心から願って、互いに励まし合い、忠告し合える信頼関係を育てる道德の時間が実践されれば、心から信頼できる友達関係を築くことができるであろう。

2 研究の内容と方法

(1) 内容項目 2 - (3) のとらえ方

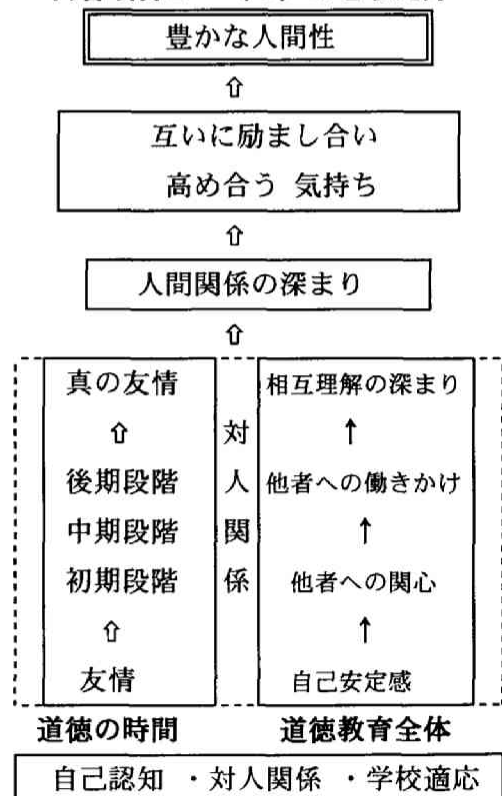
内容項目 2 - (3) は「友情の尊さを理解して心から信頼できあがる友達をもち、互いに励まし合い、高めあうこと」が指導内容である。真の友情は、相互に変わらない信頼があって成り立つものであり、相手に対する敬愛の念がその根底にある。それに気付くだけでなく、相手の人間的な成長を願い、互いに励まし合い、高めあい、協力を惜しまないという関係へと発展させようと努力することが必要である。

中学生の時期は、互いに心を許しあえる同世代の友達を真剣に求めるようになり、利害関係に左右されない同世代の友情を築こうとする気持ちが高まってくる。このような時期に、友情の尊さについて理解を深め、友情を確かなものにしようとすることは、大変意義がある。

友情とは、互いの信頼関係が存在することによって成り立つものである。その根底には、相手への敬愛の念が存在する。しかし、生徒一人一人の友情に対するとらえ方には個人差があり、その場だけの関心や自分に都合のいい相手とだけの狭い範囲の関係にとどまりがちであり、認識が乏しいのが実態である。自分の立場からだけでなく友達の内面的なよさに目を向けさせ、広い視点で友情の尊さに気付かせることができれば、「友情」についての理解を深めることができるであろう（初期段階）。

しかし、友情を理解させるだけでは、友情を築き高めることはできない。そのためには、相手に求めるだけでなく、自分自身が相手にとってふさわしい友達にならなくてはならない。自分自身を見つめ自己の内面を向上させることは、相手からの信頼を得ることにつながるからである（中期段階）。さらに、「友情」といっても危機が訪れることがある。そのような事態に正対し、危機を乗り切ろうとする姿勢は大切なことである。相手の成長を心から願って励まし合い、忠告し合える信頼関係を育てようとする姿勢が友情を維持しより高めるのに必要である（後期段階）。また、先行研究（平成 12 年度教育研究員報告書等）により、「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」の意識が高い生徒は、道徳性も高い傾向にあることが示されている。それらの意識を高めていく指導・支援を取り入れることにより、友情に関する道徳的価値を定着させ、道徳的実践力を高めようと考えた。図のように、道徳の時間で初期段階・中期段階・後期段階における適切な教材を選択し、適切な指導法を取り入れるだけでなく、学校教育全体を通じて関連を図り、豊かな人間関係の場を設けることをねらいとし指導計画を立てることにした。

内容項目 2 - (3) のとらえ方



(2)生徒の実態と指導計画

ア 調査研究について

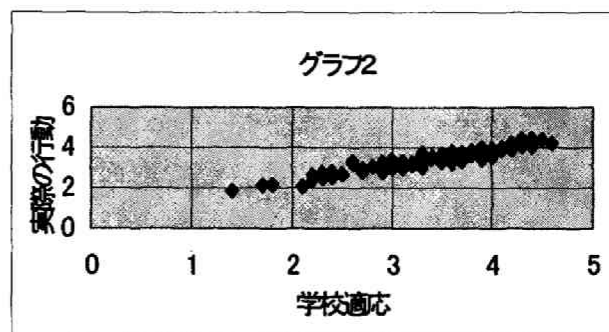
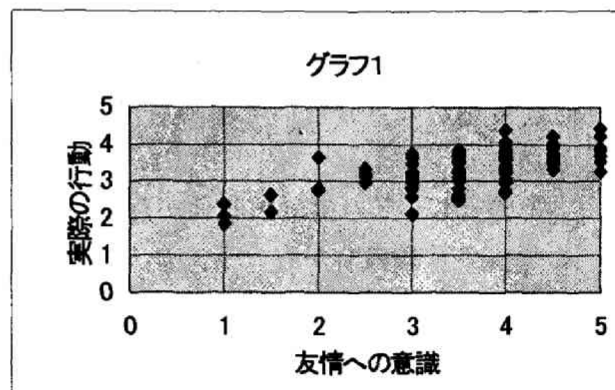
生徒の実態把握をして指導計画を作成するに当たり、事前調査を実施した。昨年度の研究成果を活用し、「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」について10項目を5段階の選択肢で数値化し、統計処理を行った。また、友情に関して、「友達の定義」、「友情に対する意識」、「実際の行動」の三つの観点から調査を行い、統計処理し分析した。

イ 調査結果と生徒の実態

友情に関しての三つの事例調査項目を互いにクロス集計した結果、「友情に対する意識」と「実際の行動」に相関が見られた(グラフ1)。

つまり、「友情に対する意識」が高い生徒は、実際の生活において期待通りの行動をしているといえる。したがって、道德の時間において、「友情に対する意識」を高める指導をすることで、道德的な実践力も向上すると考えられる。

また、「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」の意識が高い生徒ほど道德性が高いことはこれまでの研究で明らかとなっており、今回の調査も「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」が高い生徒と「実際の行動」に強く相関が出た(グラフ2)。これにより、道德の時間以外の授業や特別活動において「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」を高める活動を行うことが大切だと考え、指導計画に盛り込むことにした。しかし、「友達の定義」とのクロス集計では、どの項目とも相関が出なかった【表1】。これは、友達という言葉の捉え方が様々で、統一した理解ができていないことを示している。友情を指導していく上で、言葉のとらえ方によるすれ違いをなくすために、友達・友情についての理解を深める活動を指導計画にも盛り込んだ。



調査項目	相関係数
自己認知×友達の定義	0.08
他者関係×友達の定義	0.01
学校適応×友達の定義	0.21
友達の定義×友情への意識	0.17

【表1】

ウ 指導計画

(ア)指導計画作成の方針

- ① 指導を徹底するために、「友情」について重点化を図る。

- ② 道徳の時間を中心に、学級活動、学校行事、教科の授業での学習活動を連携させた学習指導計画を作成し、学習の深化と効率化を図る。
- ③ 上記の学習指導計画により、自尊感情をはぐくみ、対人関係を円滑にする方法を学び、また、学級・学校への帰属意識を高める指導を行う。

(イ) 「道徳の時間」学習指導案作成の方針

- ① 友達関係を4つの段階に分類し、その内容を段階的に組み込んだ授業を行う。
 - 第1段階 友達とは何か、友情とは何か
 - 第2段階 友達をどうつくるか
 - 第3段階 友達関係を質的にどう高めるか、友達を親友にするためには
 - 第4段階 友情がこわれそうになったとき、どう修復するか
- ② 学習指導案作成にあたっては、ディベート、ロールプレー、小集団による話し合いなどを活用し、生徒が自分の思いを語り、また、級友の発言に耳を傾ける場を多く設定する。
- ③ 指導にあたっては、学級担任以外の教員の参加を求め、チームティーチングによる指導を活用する。(副担任、学年教員、管理職等)
- ④ 指導にあたっては、保護者、地域との連携を図る。

(ウ) 指導計画

- ① 学級活動(朝の会、帰りの会等の日常の活動)
 - ・「1日の目標、反省」についての生活班による話し合い、発表
 - ・班日記による、生徒間、生徒と担任との交流
 - ・「仲間のよさ発見カード」等によるよいところ探し
- ② 保護者・地域との連携
 - ・「友情についての体験談」を募集して道徳の時間の導入や終末等で活用する。

	1	道徳の時間	ディベート大会「友情は必要?それともいらぬ?」
	2	学級活動	構成的グループエンカウンター「相手の感情を読み取ろう」
	3	道徳の時間	友達とは何か、友情とは何か 資料名「本当の友人関係とは」
	4	国語科	「走れメロス」:メロスとセリヌンティアスの友情をもとに、真の友情とは何かについて考える。
	5	学級活動 学校行事	合唱コンクールに向けての取り組み :お互いに励まし合い、信頼し合う関係を作ることによって、友達と心がひとつになることを知る。
	6	道徳の時間	友達をどう作るか 資料名「ちいちゃんをつめ」
本時	7	道徳の時間	友情を高めるには、友情がこわれそうになったとき 資料名「甲子園でプレーがしたい」

(3) 指導計画の工夫

ア 学習指導案作成について

ディベート、ロールプレー、小集団による話し合いなどを活用し、生徒が自分の思いを語り、また、級友の発言に耳を傾ける場を多く設定する。

イ 指導について

指導に当たっては、学級担任以外の教員の協力を求め、チームティーチングによる指導を活用する。(副担任、学年教員、管理職等) また、保護者、地域との連携を図る。

ウ 指導計画作成について

道徳の時間を中心に、学級活動、学校行事、教科の授業、総合的学習の時間での学習活動を関連させた学習指導計画を作成し、学習の深化と効率化を図る。(学習指導計画により、自尊感情をはぐくみ、対人関係を円滑にする方法を学び、また、学級・学校への帰属意識を高める。)

(4) 指導事例(第2学年)

ア 主題名 「友情」 [内容項目 2-(3)]

イ 資料名 「甲子園でプレーがしたい」 堀田泰永

ウ 資料の概要

ふたりで地元のS高校に進学し、甲子園に出場することを誓い合っていた幼なじみの義男と雄一。ところが、ある夜、雄一のもとを訪れたリトルリーグの監督は、他県にある甲子園の常連R高校から誘いがあったことを伝える。甲子園出場という夢に大きく近づく知らせに胸を躍らせる雄一、しかし、誘われたのは雄一だけだった。義男との誓いと甲子園への夢のはざまに思い悩む雄一。

エ ねらい

友達の在り方について考え、互いに励まし合い、高め合おうとする態度を育てる。

オ 学習指導過程(7/7時)

	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	教師の動き	指導上の留意点
導 入	1 これまでの学習を振り返る。		・ T 1 が、説明する。	・ 簡潔に説明する。
展 開	2 教師の範読を聞く。 3 資料をもとに話し合う。 ・ 雄一と義男の関係を確認する。 【発問1】 ・ 「雄一はR高校へ行くべきでしょうか。それとも行くべきでないでしょうか」について、挙手させる。	・ 「行くべき」が少数、「行くべきでない」が多数。	・ T 1 資料配布 ・ T 2 朗読。 ・ T 1、T 2とも机間指導をし、書けない生徒を中心に助言するとともに意見を把握する。	・ T 1とT 2のやりとりで進める。 ・ 雄一は「R高に行きたいから悩んでいる」ことを押さえる。 ・ 【発問1】について、多角的に、より深く考えさせる。

<p>展 開</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・両方の立場からそう考える理由をワークシートに記入する。 ・自分の結論を出し、その理由を記入する。 <p>4 生活班に分かれて話し合う。《班座席》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「行くべき」、「行くべきではない」という立場をはっきりさせて意見を出し合う。《席を戻す》 ・意見を発表する。 <p>5 義男の立場になって考える。</p> <p>【発問2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「雄一がひとりで悩んでいるって聞いたから、なんて言ってあげたいですか。ワークシートに書いてください」 ・意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・甲子園に行くことは自分の夢だから。 ・一生の問題だから。 ・義男との約束を破ることになるから。 ・一緒に甲子園を目指すという約束が破られて悲しい。 ・雄一が決めたことから、しかたない。 ・雄一がふたりの夢である甲子園に近づいたことが、友達としてうれしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見交流が深まるように助言する。 ・T2板書する。 ・T2板書する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表者の立場を明確にする。 ・本時の中心となる発問。狭い意味での「友情」にとらわれている生徒を義男の立場に立たせ、「真の友情」とは何かを考えさせる。
<p>終 末</p>	<p>6 友情についての保護者の体験談の朗読を聞き、「友情」とは何かについて考える。</p> <p>7 今日の授業で考えたこと、学んだことをワークシートにまとめ、発表する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・T2朗読する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朗読に集中させる。 ・二人に発表させ、ワークシートに記入されたことをが学級でまとめ、後日配布する。



カ 評価の観点

- ・ 友達の在り方について深く考えることができたか。
- ・ 互いに励まし合い、高め合おうとする態度を育てることができたか。

キ 今日授業で学んだこと（生徒の感想より）

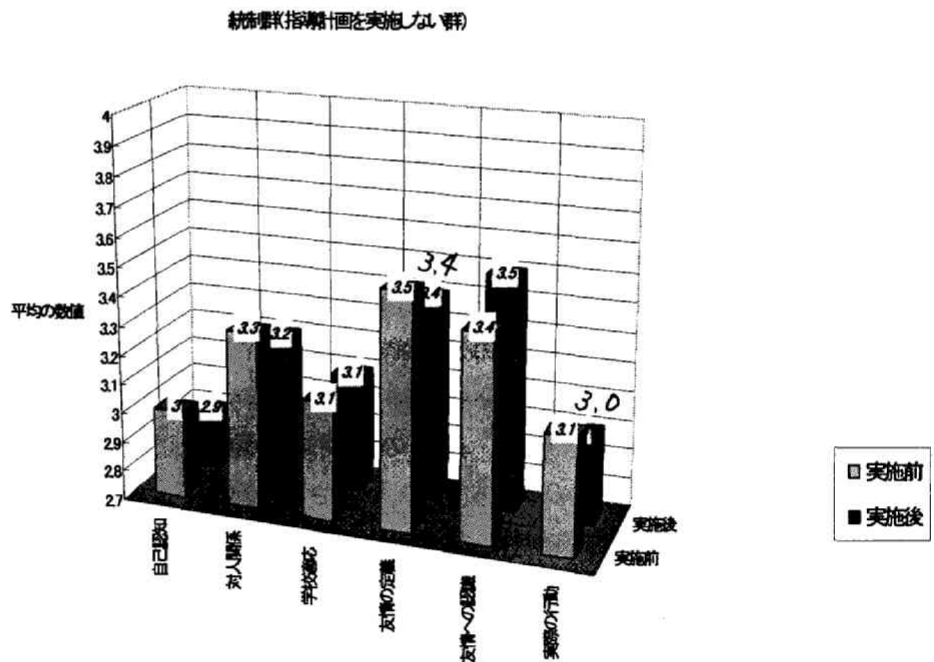
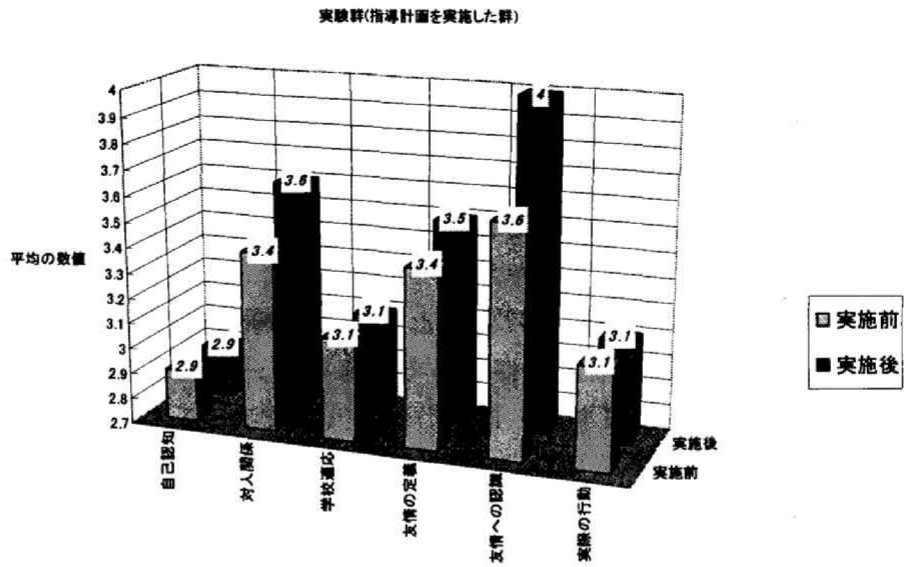
- ・ この授業をやって良かったと思う。「友人はこんなに大切」と思うようになった。悲しい時に励ましてくれたり、自分のことを深く理解してくれるのが本当の友達だと思う。
- ・ なんか「友達、友情」という言葉の意味や必要性がいつもより深くわかったような気がした。相手の気持ちを考えたり、励ましてくれるような友達がほしいと思った。それに、私もそういう人になりたいと思った。

ク 考察

- ・ 今回の授業では、生徒がじっくりと考え、自分の思いを語り、級友の発言に耳を傾ける時間を確保するために、発問を精選した。また、班で友情について話し合わせた。その結果、友情に対する様々な意見を聞き、また自分の思いを語れたという満足感を得させることができた。もっと話し合いたいという意欲を高めることができた。
- ・ TTによる指導は、資料の提示、机間指導、板書などを役割分担することによって、授業の流れを切らずにすむこと、個々の生徒の様子を把握し、生徒の多様な意見を引き出し、生徒の道徳的価値についての考えを深めることができ、大変有効であった。
- ・ 生徒が描いた登場人物のイラストを板書やワークシートに活用したこと、保護者から寄せられた「友情についての体験談」を授業の終末で朗読したことにより、生徒の「友情」に対する考えを深めるとともに感動深い授業にすることができた。

3 内容項目2-(3)「友情」のまとめ

(1) 調査結果



(2) 成果

① 指導計画を作成することの有効性について

ア 昨年度の研究報告書には今後の課題として、「自己認知の低い生徒の道徳的価値の変容をいかに図るべきか」が挙げられている。つまり、自己認知が低い生徒は指導計画等で働きかけをしても、意識の変容が見られない傾向があるということである。そ

して、このような生徒にとって重要なことは道徳的価値について理解させる指導とともに、「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」などの意識を高め、人間としてよりよく生きる力を身に付けさせる指導が重要であるということである。

そこで本研究においては、道徳の時間を中心に、学級活動、学校行事、教科の学習での学習活動を関連付けた指導計画を作成した。また、日常の朝や帰りの短学活等を有効に活用して、生徒のよい点を認め、自分の考えを発言させる機会をもつように努めた。生徒が「自己認知」を高め、「対人関係」を円滑にする方法を学び、また学級・学校への帰属意識を高める指導と合わせ、道徳的価値を深める指導を行うことで、豊かな人間性をはぐくめると考えたのである。

指導計画に基づいて働きかけをした実験群の調査結果の数値の変化を見ると、「自己認知」、「対人関係」の項目において、指導計画を実施しなかった統制群の数値の変化よりも大きくなっており、指導計画が有効であったことが分かった。さらに、本分科会では、9月の調査でこの「自己認知」等の三つの項目が低い生徒を追跡調査したところ、多くの生徒が、11月の調査で数値が高くなっており、友情に関する道徳性も高まっている傾向があることが分かった。このことから、自己認知等の意識を高めていくことが、道徳性の向上と深くかかわることが検証できたと考える。また、自己認知等の意識を計画的に高めていくことも可能であることが分かった。

したがって、各学校においては、年間を通して、継続してこれらの意識を高めていく努力が、道徳の時間を創意・工夫するとともに大切なことが検証されたと考える。

② 「道徳の時間学習指導案作成の方針」の有効性について

ア 本研究では「友情」に関する指導を重点的に行うため、複数時間をあて「友達とは何か」から「友情がこわれそうになった時、どう修復するか」までの4段階を指導計画に組み込んで授業を行った。

イ 本研究では、道徳の時間の第1時として、ディベート大会「友達は必要？それともいらぬ？」を行った。ディベートは自分の考えにかかわらず、肯定、否定に分かれて討論をするものであり、道徳の時間の学習として行うことに疑問の声もある。しかし、授業後、生徒から「友達の大切さについて、いつもより深く考えた」、「自分が考えていなかったことや、思ってもいなかった意見が出てきたので、自分の考えが広がったように思った」などの感想があった。ディベートにより、友情に対して深く考え、様々な角度から広く考えることができたことが分かる。これからも道徳の時間で、ディベートを積極的に取り入れていきたい。なおその際には、授業で「ここまではディベートですが、ここからは自分の意見を話してください」のように場面を区切ったり、授業後の感想をまとめた資料を作成する。なおその際には、ディベートの時とディベートが終了した時の自分の意見を比較して掲載するなどの配慮をすることが必要である。このことは、道徳の時間は一人一人の生徒の道徳的価値を育成することが基本にあり、自分はどう考えるのか、どう感じるのかを大切にしながら個々の道徳性を養う時間だからである。

ウ 指導にあたって、TTによる指導を導入し、資料の提示、板書、机間指導などを分

担して行った。その結果、授業の流れが切れずにスムーズに進んだこと、資料の内容がより効果的に生徒に伝わったこと、生徒の活動への援助がきめ細かく行えたこと、など大きな成果を得ることができた。

エ 授業の終末に「友情に対する保護者の体験談」の朗読を取り入れた。募集した体験談のなかに、授業のねらいに合致したふさわしい内容のものが常にあるとは限らない。また、体験談が生徒に与える感動が大きすぎて、授業のねらいが薄まってしまう可能性もあるが、むしろ積極的に取り入れることにより、生徒にとっても自分の学級の保護者という身近な大人が体験したことを聞けるという意味でも使用する効果は大きいと考える。

オ 調査結果を見ると、「友情の定義」、「友情に対する意識」の項目において生徒の意識が大きく変容していることから、本分科会で立てた指導計画が有効であることが分かった。

- ③ 以上のことから、本分科会の研究仮説「友情について理解し、相手の成長を心から願って互いに励まし合い、忠告し合える信頼関係を育てる道徳の時間が実践されれば、心から信頼できる友人関係を築くことができるであろう」が検証されたと考える。

(3) 課題

- ① 生徒の自尊感情をはぐくみ、対人関係を円滑にする方法を学び、また、学級・学校への帰属意識を高める指導を年間を通して継続して行う必要があるが、その方策については発達段階を踏まえ組織的に行う必要がある。
- ② 本研究では「友情についての認識」を高める指導を追究し、その結果、一定の成果をあげることができたと考える。しかし、調査結果を見ると、「友情への認識」は高まっているが、それが「実際の行動」につながっていないことがわかる。道徳の時間で学んだことを、教科の授業、総合的な学習の時間、学級活動、学校行事、生徒会活動など道徳的実践活動の場面での意図的な指導をしていくことが大切であり、組織的に家庭とも連携しながら進めていくことがより必要である。

Ⅳ 内容項目 2 - (5) 「他に学ぶ広い心」についての指導(第 2 分科会)

1 主題設定の理由

人は、それぞれ姿が異なるように、人生経験や考え方、感じ方、ものの見方なども様々である。私たちは、その違いをお互いに認め合いながら生活していかなければならない。

しかしながら、少子化や核家族化、地域連帯意識の希薄化など、子どもの社会性を培うためのマイナス要因が多くなってきている。そのため、他の人とのかかわりを身に付ける機会や、謙虚になって相手から何かを学ぶという経験が少なくなってきており、ものの見方、考え方に多様性があることを認めにくい状況にある。また、社会全体が他人のことを考えず、もっぱら個人の利害得失を優先する傾向も強くなっている。このことは、生徒の道徳性を育成する上で大きな障害となっている。もちろん、生活の中で接するすべての人々に理解を示し、寛容であることはできない。自分の考えに固執する傾向も見られ、それを乗り越えて他から謙虚に学ぶ広い心を育成することが、よりよい生き方につながることに気付かせていくことが肝要である。

中学生の時期は、肉体的にも精神的にも発達が著しく生徒一人一人の個性や立場がはっきりしてくるとともに、「自分なりに納得した生き方や考え方をしたい」と望んでいる。すでにこの時期には、人によってもものの見方や考え方に違いがあることに気付いているが、人生の経験も浅く、ものの見方もそれほど広くはないこともあって、時として自分の考えや立場に固執し、対人関係に摩擦や対立を引き起こすようなこともある。そのために相手の気持ちを傷つけたりして、人間関係がうまくいかない場合が多い。逆に、同調過剰の傾向も生じやすく、いじめのような問題行動を起こすこともある。このような状況は、それぞれの個性や立場をお互いが理解し、尊重する気持ちが欠けているところから生じるものといえよう。

今後、国際化、高度情報化、高齢化などが進めば、外国人、高齢者など様々なものの見方、考え方をする人との共生が重要になってくる。その時、相手の個性や立場を尊重し、相手のことを考えられる心、相手の個性を受け入れ理解し学ぼうとする広い心が、豊かな人間関係を作る基盤となると考える。また、自分とは異なる個性の持ち主に出会うことによって、自分自身の存在に対する自覚が芽生え、その中から謙虚に他に学ぼうとする広い心が育つとともに、個性を伸ばしていくことになると考えた。

以上の点から、第 2 分科会では、豊かな人間性を身に付け成長をしていくためには物事には多様なものの見方、とらえ方、感じ方があることを知ることが大切と考えた。さらに自分に寄せられる温かな忠告や助言に感謝するとともに、自分を見つめ、謙虚な心をもって他に学ぼうとする姿勢が、中学生の時期には極めて重要なことであると捉えた。そして、「豊かな人間性をはぐくむ」ために、内容項目 2 - (5) 「他に学ぶ広い心」を育てることを通して、次のような仮説に基づいて研究を進めることにした。

仮説

集団の中で自分を見つめ、他人の言葉や行動を受け入れることの大切さを知り、これを自らの向上に生かすことができれば、謙虚に他に学ぶ広い心を育成することができる。

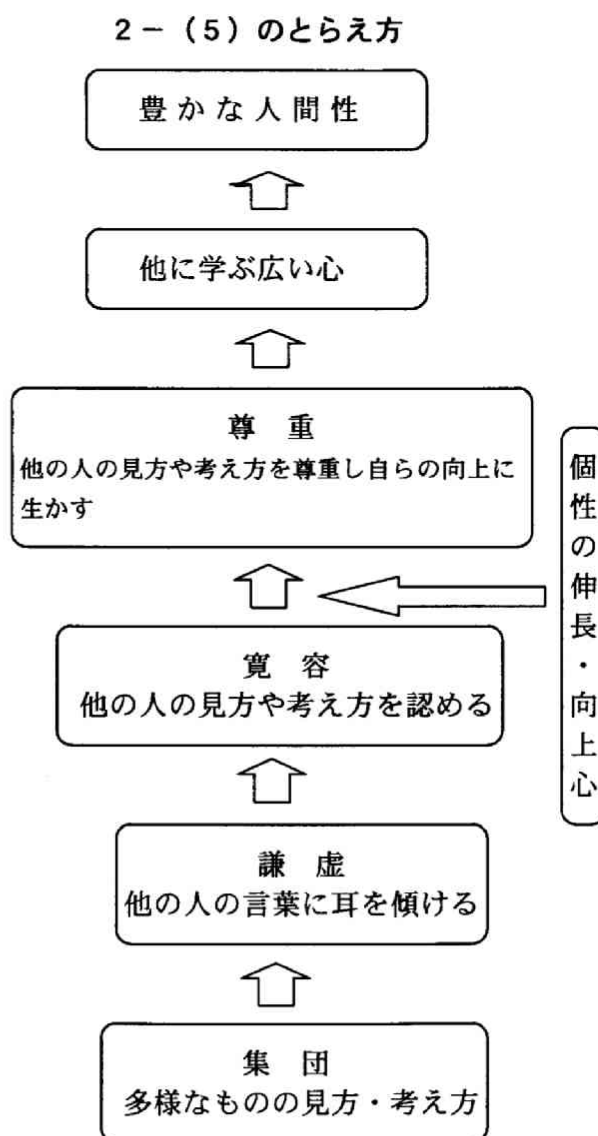
2 研究の内容と方法

(1) 内容項目 2-(5)のとらえ方

内容項目 2-(5)は「それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、謙虚に他に学ぶ広い心をもつこと」が指導内容である。生活の中で接する全ての人をいつも正しく理解し、かつ寛容であることは難しい。また人生経験の違いから感じ方やものの見方なども人それぞれに異なる。その違いをお互いに認めながら生活していくことが必要である。しかし、中学生の時期には、偏狭なものの見方や考え方をする傾向があり、他人の意見や忠告に謙虚に耳を傾けられなかったり、自分と異なる立場や行動を認めようとしないことがある。このような問題は、それぞれの個性や立場を互いに理解し尊重する気持ちの不足から生じているものと考えられる。また、個性は自分の努力だけでなく、人とのかかわり合いの中で謙虚に他に学ぶ広い心をもってこそ伸びていくものである。即ち、互いのよさを見つけ個性を認めようとする姿勢を育てていけば、そこから謙虚な心をもって他に学ぼうとする積極的な態度を育成していくことができ、他に学ぶ広い心をもち豊かな人間性を育成することになるであろうと考えた。

上記のような観点から、右図のようにとらえ「他に学ぶ広い心」の育成を考えた。集団の中には様々なものの見方や考え方がある。そのことに気付くにはまず、相手の言葉に謙虚に耳を傾けることに始まる。そこから相手の独自性を認め、相手のものの見方や考え方を十分に理解し尊重していくのである。自分と異なる他人の立場や個性に対して寛容な心で、他に謙虚に学んでいこうとする姿勢が、よりよい人間としての成長には必要である。

また先行研究から「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」に関する意識で高い傾向を示す者は、道徳性も高い傾向があることから、本研究においてもこれらの意識を高めていくことを押さえながら研究を進めることが有効であると考えた。このような意識を高めることは、学級を信頼関係に基づいた集団に育成していくことと合わせて研究を推進していくことを改めておさえたものである。このような考え方に立って調査研究を行い、その結果に基づいた指導計画を作成し段階を踏んだ重点化を図った実践を行い、研究を進めることにした。



(2) 生徒の実態と指導計画

ア 調査研究について

研究の方向性を探り、指導計画を作成するに当たり事前に生徒の意識調査を行った。

「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」のそれぞれ10項目を5段階の選択肢で数値化して集計し、それぞれの項目間で統計処理を行った。また、「他に学ぶ広い心」の意識を知るために三つの事例について意識調査を行い、その調査結果と「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」の調査項目との関係を統計処理した。「他に学ぶ広い心」が育つてどうかを調査するために、下記の事例調査項目を設定した。

「事例1」

- ・話し合いのとき、普段あまり話さない友達の考えを聞いて、「なるほど」と思う。

「事例2」

- ・クラスメートの一人一人の良いところを一つ以上あげることができる。

「事例3」

- ・友達に「地域清掃活動」に参加しようと誘われたら、あなたは参加しますか。

イ 調査結果と生徒の実態

「事例1」、「事例2」、「事例3」の三つの項目で「とてもそう思う」「そう思う」と回答した生徒は「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」の意識も高いことが統計処理の結果から分かった。このことから、他に学ぶ広い心を育てるには、「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」の意識も高める指導が必要である。

ウ 指導計画

調査結果に基づき「他に学ぶ広い心」を育てるためには、「自己認知」、「対人関係」「学校適応」を学校生活のあらゆる場面で総合的に向上させていくことも大切である。

例えば、朝や帰りの短い学活の時間に、生徒の給食、清掃などの当番活動で良い点を教師がみんなの前で評価したり、生徒に自分の考えを発言する機会を意図的にもつなどを心がけるように計画した。また、これと合わせて、道徳の時間に「他に学ぶ広い心」を段階的に重点的に指導し、かつ学校行事等の教育活動と関連を図る指導計画を立てた。

10月第1時	道徳の時間	「イヌワシ」1-(5)個性の伸長・反省と向上 ・自らの生活を謙虚に振り返り、自己を厳しく見つめ、個性の伸長に努めようとする心情を養う。
10月第2時	道徳の時間	「3分間」2-(5)他に学ぶ広い心 ・謙虚に自分を見つめ、他人の言葉に耳を傾けることの大切を知り、これを自分の心の成長に役立てようとする意欲を育てる。
10月第3時	道徳の時間	「月世界」2-(5)他に学ぶ広い心（構成的グループインタビュー） ・自己や仲間のもの見方、考え方を知ると共に、グループ全員が合意することの難しさ大切さを体験的に学ぶ。

10月第4時	道徳の時間	「ぼくのどこがいけないの」2-(5)他に学ぶ広い心 ・人それぞれのものの見方や考え方があることを理解し、それを尊重し、認めようとする態度を育てる。
10月第5時	学活の時間	文化祭の「劇」の役割分担をして他の係と協力しながら、責任をもって仕事を進める。

(3) 指導計画の工夫

ア 指導計画の工夫

○ 段階を追い、複数時間にわたる重点的な指導

「他に学ぶ広い心」の指導にあたっては、内容項目2-(5)のとらえ方で述べたとおり「謙虚」→「寛容」→「尊重」の3段階を経て培うことができると考えた。そこで、各段階に適切と思われる資料を選定し、段階を追って重点的に道徳の時間を行うため、複数時間を充てた。

○ 他の内容項目との関連

個性を生かし、よりよく生きたいという願いが、自己の向上につながる。また、個性は他に認められながら伸びる側面をもっている。そこで、互いにその人のよさを認め合い、自己認知を高め、自己理解を深めさせることが大切と考えた。すなわち、他から学ぶことが、個性を伸長することにつながると考え、内容項目1-(5)個性の伸長・向上心に関連付けて指導することにした。

○ 特別活動との関連

特別活動の学校行事には、活動を通して個性を伸ばすことや他者の発表等を見たり聞いたりする際の望ましい態度を養うことなどをねらいとした行事がある。そこで、道徳の時間で学んだことが特別活動の具体的な活動場面で生かされ、実践されることによって深められるように関連を図った指導計画を作成した。

イ 道徳の時間の工夫

○ 体験的活動を取り入れる

構成的グループエンカウンターエクササイズやゲーム性のある活動は、生徒の興味や関心を高め、学習への意欲を喚起することができると考えた。道徳の時間にこれらの体験的活動を学習指導過程上に位置づけ、その体験をもとに道徳的価値についての自覚を深める工夫を行った。これは、体験を通して感じたり考えたりすることにより自分自身の問題として深くかかわり、ねらいの根底にある道徳的価値について理解を深めさせることができると考えたからである。

○ 話し合い活動を取り入れる

生き生きと活動し主体的に考えを深められるよう、小集団による話し合いを取り入れた。話し合いは、他者の考え方についての理解を深めたり、自分の考え方を明確にしたりすることができるので、道徳的実践力を身に付ける上で効果的な方法である。「他に学ぶ広い心」を育てるには、有効な学習方法であると考えた。

また、話し合いを効果的に展開できるよう、初期段階では、「班で話し合う時の注意

事項」や「発表の聞き方」を黒板に掲示し、生徒が意識できるようにした。

○ 発問の工夫

道徳的価値を自分の問題として受け止め、深く自己を見つめることが可能となるよう「振り返り」の発問をした。日常生活や学校生活を振り返り、頭の中では分かっているのに、なぜできないのかということについて考えさせることにより、ねらいとしている道徳的価値により深く迫れるようにした。

(4) 指導事例（第1学年）

ア 主題名 「他に学ぶ広い心」＜内容項目2-(5)＞

イ 資料名 「月世界」

ウ 資料の概要

「宇宙船が月面で故障したとき、地球に帰還するために必要と思われる道具を選ぶ」ということを題材とし、みんなで話し合いをするときの態度を学ぶ。

エ ねらい

グループ内で意見を交換することにより、他者の意見に謙虚に耳を傾けることの大切さを理解し、謙虚に学ぶ広い心を育てる。

オ 学習指導過程

前時に、「月世界」のワークシートを渡し、自分自身で考えて必要な道具(備品)に順位をつけておく。その際に、相談しないで一人で考える、どうして必要なのか考えながら順位をつけるように指導する。

本時

	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	教師の動き	指導上の留意点
導入	1 ワークシートを用いて、班としての意見をまとめていくことを知る。	・「道徳」の時間でゲームの要素の強いものを行うのは初めてなので楽しみにする。	T1 が本時の流れを説明する。	・全てに順位がついていなくてもよい。
展開	2 班で意見を発表し合い、ワークシートに記録する。	・「自分と同じだ」 ・「順位は同じだが、理由が違う」 ・「自分と異なる考えだ」 ・「なるほどそういう考えもあるのか」	T1 班をつくり、話し合うよう指示する。 T2 班での話し合いをするときの留意点を示す	・一人一人の考えを大切にしながらできる限り班のみんなが納得のいく方法で班としての意思を決定する。
	3 班としての順位をつけ、決定した順位を「掲示用カード」に記入し、完成後、黒板に掲示する。	・「多くの人が優先順位を上になっているから、これを1位にしよう」 ・「この理由は納得できるから、これを〇位にしよう」	T1、T2 机間指導をしながら、話し合いを活発にさせるように促す。	・一人の意見だけで決定することなく、全員が話し合いに参加するように指導する。

	4 「班で決めた順位を発表してもらいます。どういう理由で1位になったのかも説明してください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分たちの班と同じだ」 ・「自分たちとは違う意見だ」 ・「なるほど」 	<p>T1 班の代表者に話し合った内容を発表をさせる。</p> <p>T2 発表を聞くよう指導する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・代表者にはっきりと話し合いの結果を伝えさせる。 ・静かに意見を聞くように指導する。
展	【発問①】 「班での話し合いのとき、お互いの意見をよく聞きながら話し合いを進めましたか」	<ul style="list-style-type: none"> ・「お互いの意見を聞きながらできた」 ・「お互いの意見を聞きながらできなかった」 	<p>T1 【発問①】をし、相手の話を聞くことができた生徒に挙手をさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いのときの様子を静かに、省みさせる。
	【発問②】 「話し合いがうまくいかなかった班は、どこに問題があったのでしょうか。」	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分の主張ばかりした」 ・「一人の意見が強すぎた」 ・「意見を言わなかった」 	<p>T1 【発問②】をし、数人を指名する。</p> <p>T2 内容を板書する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・個人を責めることがないように配慮する。
	【発問③】 「話し合いを通して、自分の意見が変わった人は、なぜ変わったのか教えてください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・「納得できる理由だった」 ・「話し合いをしているうちに、自分もそう思うようになった」 ・「この道具が絶対に必要だと思った」 	<p>T2 【発問③】をし、数名を指名する。</p> <p>考えが変わらなかった場合も答えさせる。</p> <p>T1 板書する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・十分に話を聞き、自分で考えて判断する態度を養わせる。 ・変わらない場合も考える。
	【発問④】 「話し合いをした時の感想や感じたことを聞かせてください。」	<ul style="list-style-type: none"> 「いろいろな意見が聞けた」 「様々な考え方があることを知った」 「話を聞くことは大切」 	<p>T1 【発問④】をし、数名を指名する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合ったときの感想から「話を聞くことの重要性」を導き出していく。
	【発問⑤】 「『人の話を聞くことの大切さ』をみんな理解しているようだが、普段の生活の場面ではどうだろうか。学活などの話し合いの時、うまくいっているだろうか。」	<ul style="list-style-type: none"> ・「人の話を聞かない人がいる」 ・「みんな、自分の主張ばかりしている」 ・「話を聞くことの重要性は理解しているが話し合いになるとつい自分の意見を押し通してしまう」 	<p>T2 【発問⑤】をし揺さぶりをかける。</p> <p>数人を指名する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの発言中に話を良く聞き、理解するように常に意識させる
開	5 他人の立場を理解	<ul style="list-style-type: none"> ・「いろいろな立場、考 	<p>T1 人間の弱さ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・話を聞いた上で、

	し「人の話を聞くこと」の重要性を改めて確認する。	え方がある」 ・「人の話に謙虚に耳を傾けることは大切だ」	に触れ、お互いの立場を理解することの重要性を説く。	その考えを受け入れない場合もあることも指導する。
終末	6 本時の感想を書き、発表する。	・「人の話を聞くことの重要性がわかった」 ・「人の話を聞くことは難しい」	T1 数名を指名し、発表させる。	

カ 評価の観点

- ・ 実際の話し合いを通して、「人の話を聞くこと」の大切さに気付くことができたか。
- ・ 謙虚に他に学ぼうとする態度を育てることができたか。

キ 生徒の感想から

- ・ いろいろな人の考え方の違いが分かり、とても楽しかった。
- ・ 友達と話しているとき、友達に意見を合わせたりしていたけれど、これからはきちんと自分の考えをもち、それを言えるようにしようと思う。
- ・ 人の意見を聞いて、自分の意見が変わったことがあるから、他人の意見を聞くことは大切だと思った。
- ・ こんな意見もあるんだなぁと納得したり、違うなぁと思ったり、いろいろな事を考えさせられた。やはり、一人一人の意見を大切にしていこうことが大切だなぁと思った。
- ・ 班で話し合うと、意見が違う人もだんだん意見が変わり、みんな最後には一つの意見になったので、話し合うのは大切なことだと思った。
- ・ 限られた時間の中で、みんなの意見をまとめるのは難しかった。

ク 考察

今回の授業では、ゲーム性のあるもので生徒の興味を引きつけ、体験活動を通して道徳的価値とするねらいに迫ろうということで、構成的グループエンカウンターエクササイズを多少アレンジして取り入れた。生徒同士の話し合いの時間を十分確保することに重点を置き、次の4点に留意して班内で話し合わせた。

- ・ 納得のいくまで話し合うこと。どうしてもいいやと考えないこと。
- ・ 話し合いは勝ち負けではないこと。
- ・ 多数決や平均で順位を決めないこと。
- ・ 少数意見でも十分に耳を傾けること。

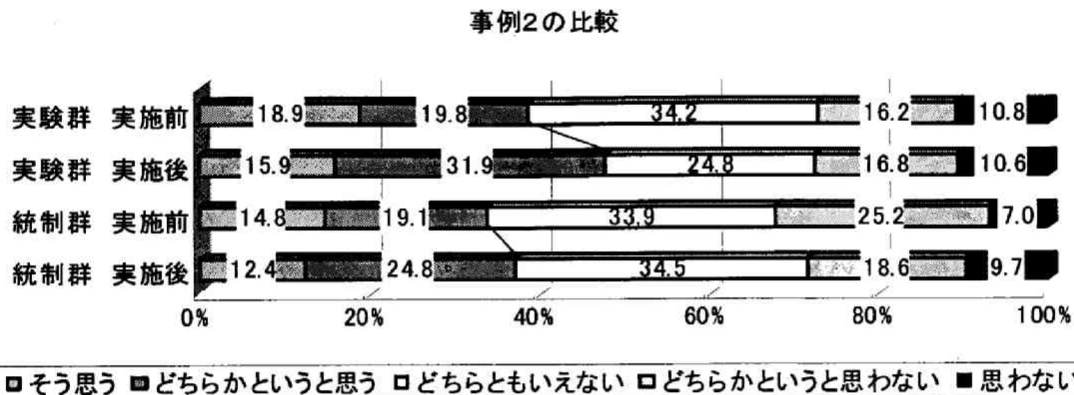
その結果、話し合いの中では、自分の意見を理由もつけてしっかりと主張する生徒、それに反論する生徒、また他人の意見に納得して自分の意見を変えていく生徒などが各班ともに見られ、話し合いを深めることができた。

このように、友達のもの見方・考え方に耳を傾けることの大切さを理解し、謙虚に他に学ぼうとする態度を養うことができたと同時に、グループのメンバー全員が合意することの難しさや大切さを体験的に学ばせることができた。

3 内容項目 2 - (5) 「他に学ぶ広い心」のまとめ

(1) 成果

研究前後の「事例 2」の項目を比較したグラフを下に示す。



この結果から、指導計画を実践した実験群において「事例 2」の調査項目で、「とてもそう思う」「そう思う」の生徒の割合が、指導計画を実践しなかった統制群よりも増加の割合が大きいことが分かる。同様の結果が「事例 3」に関しても得られた。一方、「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」が高まった生徒の中での「事例項目」意識の向上は明確にならなかった。

(2) 考察

- ア 「他に学ぶ広い心」を調査する二つの事例項目で「とてもそう思う」「そう思う」と回答した実験群の生徒の増加の割合が、統制群より大きいことから、指導計画は「他に学ぶ広い心」を育成するのに有効であることが検証されたといえる。
- イ 「他に学ぶ広い心」の育成を段階的、重点的に道德の時間で指導し、かつ特別活動などに関連させ指導したことは、効果があることが分かった。
- ウ 構成的グループエンカウターのエクササイズをアレンジした活動を道德の時間に取り入れたが、生徒は非常に高い興味を示し意欲的に活動した。
また、体験の中で考えたり、判断したり、感じたことを道德の時間で発表するので話し合いも活発になった。
- エ 小集団による話し合いは、自分の考えを伝え、他の人の話を聞く態度を養うのに効果的であった。

(3) 課題

- ア 「他に学ぶ広い心」の意識を調査する事例の調査項目の設定については十分に吟味できなかったこともあり、今後十分検討する必要がある。
- イ 本分科会では「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」と「他に学ぶ広い心」に関する事例項目の相関は一部見られたが、指導計画実践後の調査からは、「自己認知」等の項目が高くなった生徒の道德性の向上との関係を明確にはできなかった。これは指導の在り方が不十分であったことを示していると思われるので、今後改善していきたい。

V まとめと今後の課題

1 まとめ

- (1) 本研究において、指導計画を実施した生徒と指導計画を実施しない生徒対象に7月と11月に同じ設問で意識調査を行い、研究の成果を客観的に捉えようと試みた。

この研究方法により、生徒の実態把握等が具体的にでき指導計画を作成する上で大きな示唆を得ることができた。また、研究前後の生徒の意識の変容を客観的にとらえるためにも有効であった。

- (2) 道徳の時間のねらいを達成するためには、道徳の時間の指導をいかに工夫するかが問われていることはいうまでもない。しかし、それだけでは不十分である。昨年に引き続き、「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」に関する生徒の意識調査から、これらの意識の高い生徒はねらいとする道徳性についても高い意識をもっている傾向があることが分かった。したがって、道徳の時間をかなめとしながら、これらの意識を高めていく指導を意図的、継続的に行っていくことが重要である。
- (3) ねらいとする道徳的価値を深めるために重点的に指導すること及び他の教育活動と関連付けた指導が、有効であることが検証された。特に、同じ内容項目を重点的に指導する段階を工夫したり、特別活動等との関連付けを図ることが有効であることが分かった。
- (4) 第2分科会では指導計画の中で、体験的学習としてディベート、グループエンカウンターエクササイズを取り入れ、その活動を踏まえてねらいとする道徳的価値について話し合いを試みた。生徒は、意欲的にこれらの活動に取り組み、道徳的価値について話し合えた。このことから、道徳の時間における読み物資料に換わる位置付けでディベート、グループエンカウンターエクササイズを活用できるのではないかと考える。
- (5) 道徳の時間においてもTTによる協力教授があるが、第1分科会では、保護者に道徳的価値に関する内容で体験談の提供を依頼し道徳の時間の終末部分で活用した。保護者からの体験談の資料は、身近な保護者の生き方から学ぶ意味で効果的と考える。
また、校内の教職員とのTTは、役割分担を計画的に実施すれば、ゆとりをもって授業を進められ、生徒の考え方にもきめ細かく対応できる。さらにお互いの道徳の時間の進め方について情報交換の場にもなり、質の向上にもつながると考える。

2 今後の課題

- (1) 「自己認知」、「対人関係」、「学校適応」の高い生徒は、道徳性が高いことが今年度も分かったが、自己認知等の意識を高めていく方策については、さらに、指導計画及び指導方法を工夫していく必要がある。
- (2) 本研究で提案したディベート、エンカウンターエクササイズを活用することについては、今後も引き続きその有効性について研究していく必要がある。
- (3) 本研究を基に各校の実態に即した実践を積み重ね、よりよい指導の在り方をさらに確立していきたいと考える。

平成13年度教育研究員研究報告書

〔東京都教育委員会印刷物登録
平成13年度 第41号〕

平成14年1月23日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒1-1-14
電話番号 03-5434-1976

印刷会社名 株式会社 ドゥ・アーバン